国宝「紙本著色粉河寺縁起」
写真提供/粉河寺

国宝「沃懸地螺鈿金銅装神輿」
写真提供/新宮八幡神社

紀の川市 文化財マップ

【建造物・史跡・名勝・天然記念物】

発行　紀の川市教育委員会
発行日　平成28年9月30日
〒640-0492 和歌山県紀の川市西大井338番地　電話0736-79-3907　印刷　株式会社ウイング

紀の川市の歴史と文化財

はじめに

わたしたちの町「紀の川市」は、吉野・高野を水源とし和歌山県北部を西流する紀の川の流域に農業を基幹産業として発展してきました。また、北部の和泉山脈、南部の龍門山系等の山々の恵みを受ける自然豊かな町であり、龍門山の磁石岩、キイシモツケの群生地をはじめとする天然記念物が数多く所在します。このように優れた環境の中で、私たちの祖先がどのように活躍してきたかを振り返ってみましょう。

旧石器時代　竹房の堂坂遺跡(北❷)や貴志川町神戸の平池遺跡(南❷)などでは1万数千年前のナイフ形石器が出土し早くから人々の生活が展開していました。また、貴志川町長山の大池遺跡(南❷)は旧石器時代から次の縄文時代にかけての細石刃(木柄の先に埋め込み結んだとして使用)など多数の石器が出土し、長期間にわたる狩猟の場であったことがわかっています。

縄文時代　縄文時代草創期では有舌尖頭器(投げ槍先端の石器)が荒見の荒見遺跡(南❷)ほかで、中三谷の不動寺谷遺跡(北❹)では南太平洋にルーツをもち丸木舟造りに用いられた丸盤形石斧によく似た柱状片刃石斧が出土しています。

縄文時代を代表する堂坂遺跡は紀の川に突出した北岸の段丘上にあり、中期から晩期にかけての石器・土器が多量に出土しています。木の実などをすり潰すのに用いた石皿・磨石、紀の川で魚網漁をしたこともものがたる円小礫を加工した石錘や竪穴式住居跡の出土は、旧時代に比べ飛躍的な食料の確保が定住をもたらし、「ムラ」を形成していった様子を教えてくれます。

弥生時代　縄文時代終末期より頃伝わった水稲耕作を生活基盤とする弥生時代の人々は紀の川の氾濫原を避けて堂坂遺跡出土の前期の土器などが示すように段丘上に集落を営みました。このことは紀の川、貴志川に流れ込む中小河川の水コントロールし段丘部のなかの低い土地に水田が営まれたことを想起させています。東田中の東田中遺跡(北❹)などのほか貴志川町北山の北山三嶋遺跡(南❹)や豊花遺跡(北❹)で後期の竪穴式住居跡が出土しています。なお、貴志川町前田の前田遺跡(南❹)の住居跡が示すように、沖積低地への進出は弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて開始されるようです。

古墳時代　弥生社会の階層分化が進行し、古墳時代前期の初頭には、奈良盆地南部などで厚葬思想のもと大型高塚墳墓の築造が始まり、時を待たずして権威のシンボルとして我が国特有の前方後円墳が出現しました。県内では和歌山市に小型の初期前方後円墳が築かれますが紀の川市内では古墳時代前期の古墳は確認されていません。現在のところ貴志川町神戸の貴志川左岸段丘上に築造された鍵子塚古墳(南❹)など中期の大型円墳が最も古い古墳で、後期には前方後円墳である貴志川町長原の双子三昧塚古墳(南❺)や貴志川町神戸の平池1号古墳(南❺)が築かれます。市内各地の後期古墳は一部を除き円墳が主体であるのに対して、前方後円墳が築かれた貴志川地域の優位性を示しているといえます。

飛鳥時代　後期古墳を築いた有力氏族は終末期古墳築造を経て中央の宗教政策の影響を受け仏教寺院を建立しました。紀の川市内でも貴志川町北山に北山廃寺(南❾)、桃山町最上に最上廃寺(南❾)と呼ばれる飛鳥・白鳳寺院が建立されています。この2寺院は岩出市の西国分廃寺とともに、よく似た瓦を用いて四天王寺式の伽藍配置を採用したようです。また、荒見の荒見廃寺(南❾)からは和歌山市の上野廃寺系の瓦が出土しており、紀の川流域の旧名草・那賀を範囲とする共通点がみられます。この頃、中央では天皇を中心とし律令制が整備され中央集権化が進みます。

奈良時代　平城京が都となった天平期には東国分に紀伊国分寺(北❶)が建立され、南海道諸国(紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊予・土佐)を結ぶ現在の国道に当る南海道が国分寺の南を東西に走り、公地公民制の下、条里地割などが田地等の土地基盤政策が進められます。しかし、一方では、聖旧永世私財法などにより有力社寺、貴族、諸豪族による広大な開墾地の占有が始まり、その財力によって奈良時代末には、国宝「紙本著色粉河寺縁起」が大伴孔子古の創建と伝える粉河寺(北❷)のように有力者による私的な寺院が出現し始めます。

平安時代　公地制の崩壊が律令制の弱体化をもたらし天皇家の権威も衰退していきます。かわって藤原氏や有力な社寺の勢力が増大するとともに国分寺領、粉河寺領、国衙領を除く市域のほとんどが摂関家、高野山金剛峯寺、石清水八幡宮などの荘園となっていきます。鳥羽天皇の皇后美福門院は天皇の死後その霊を弔うため荒川荘を高野山金剛峯寺へ寄進したことは有名です。現地で荘園の実配をまかされた官吏とは上級、武士化し、やがて、それらの勢力は領家(荘園所有者)を通じ勢力へと発展していきます。西行法師を歌出した竹房の佐藤氏などが地方でカをつけました。

鎌倉時代　平氏一門から政権を奪取した源頼朝が開いた鎌倉幕府の権力を掌握した執権北条氏一族は、北条政子が高野山金剛三昧院多宝塔(国宝)を建立し、幕府御家人安達泰盛が高野山町石を再整備したように幕府は高野山の勢力を容認しました。紀州の在地勢力であった湯浅氏、隅田氏も幕府との繋がりを強めていますが、やがて北条氏の専制政治への不満が高まり幕府御家人の間でも勢力が二分されました。また、在地の新興勢力も現われ、荒川荘の悪党源為時のように幕府や高野山に対抗する勢力へと発展するなど、幕府権力は末期的症状となり大覚寺統の後醍醐天皇による建武新政、足利尊氏による室町幕府の開設へと時代は移っていきます。

室町時代　建武新政で領地を否の権限をもった天皇に対して不満をいだく地方の武家を背景に勢力を伸ばした足利尊氏は後醍醐天皇の皇子、護良親王を拘束するなど天皇側と対立しました。紀州ではこれを契機に天皇側を支持する勢力が飯盛山で挙兵するなど各地で不穏な政治状況が広がっていきました。尊氏は天皇方の勢力を抑えるため持明院統の光明天皇を立て室町幕府を開設しました建武新政は早くも挫折し南北朝並立の時代(**南北朝時代**)を迎えます。『太平記』紀州鷹門山軍事などが伝えるように紀伊国における南北朝最大の合戦が最初ケ嶽(南❾)、龍門山で起こりました。最初ケ嶽に陣取った南朝方の四条中納言隆俊軍と北朝方の畠山国清軍との熾烈な戦いの結果、紀北の南朝支持勢力は幕府方により鎮圧されます。貴志川町岩小野の地蔵寺の宝篋印塔(南❾)には嘉応元年、貴志川町岡田の薬師寺板碑群(南❾)の一つには明徳2年と北朝年号が使われています。その後、南北両朝が統一されますが、荘園を領国化した守護大名の勢力争い、将軍家などの跡継ぎ問題に端を発した応仁の乱により戦国期(**戦国時代**)を迎えます。しかし、紀北には高野山、粉河寺、根来寺の大きな勢力があったため戦国大名は出現していません。

安土桃山時代　戦国動乱により権威を失った将軍足利義昭を追放した織田信長は紀州平定に向かい二男信孝が高野山を攻め撃滅されます。この時、南北朝期の山城などを織田方、高野山方が前線基地として利用したようです。信長が本能寺の変で死亡したため戦いは中断されますが、信長の遺志を受け継いだ秀吉は天正13年(1585)紀州へ侵攻し、根来寺や粉河寺を攻め高野山にも迫りました。この時、高野山の応其上人は、和議のため奔走するとともに高野山復興の援助を獲得し、桃山町最上の興山寺(南❾)や岡神田の三船神社本殿(南❾)などの建立、各地の池溝開発にも力を注いでいます。

江戸時代　織豊政権の後を受けた徳川家康は十男頼宣を和歌山に入府させ産業振興や治藩制度の整備を行う一方で既存の宗教文化にも配慮しています。徳川治世の小田井開削、大和街道や名手本陣(北❸)の整備、粉河寺・十禅律院(北❷)などに徳川氏の事跡が残されています。また、世界で初めて麻酔手術を行った華岡青洲関連の文化財(北❷、❸、❹)や、幕末に吉田松陰らに大きな影響を与えた森田節斎の墓碑(南❷)なども残されています。

明治時代以降　西欧の新技術を摂取し近代化が推進された明治時代、紀の川市では明治11年頃には飯盛鉱山(南❹)で銅の採掘が始まり、県内最古となる洋式煉瓦積の池田トンネル(北❸)が明治17年に起工、同19年に竣工しています。小田井では大正3年に木積川に、同8年には穴伏川に煉瓦積みなどによる洋式の渡井橋(北❸、❹)が架構されるなど近代化が進みました。

平成17年には、より充実したまちづくり目指し紀の川水系で結ばれた旧打田町・粉河町・貴志川町・那賀町・桃山町が合併して総面積228.21kmの紀の川市が誕生しました。

粉河寺大門

粉河寺本堂

粉河寺千手観音

粉河寺大門

20 国建 粉河寺本堂ほか3棟 粉河

奈良時代の末、大伴孔小古の創建とされる粉河寺は、豊臣秀吉の焼き討ちのあと、寺僧、藤堂高虎、信者らが協力して復興を図るが、正徳3年(1713)の火災で大門を除く諸建物が焼失した。その後、再度、伽藍が復興された。本堂、千手堂、中門、大門が重要文化財。

本堂は一重屋根の礼堂と二重屋根の正堂を結合させ享保5年(1720)に上棟、礼堂正面の千鳥破風、軒破風の向拝、正堂正面の軒唐破風など変化に富む。本尊、千手千眼観音。

千手堂は宝形造、本瓦葺の三間堂で、正面に一間の向拝を付ける。天井には薬器、草花、鳥、日月などの色彩画195枚が描かれている。本堂完成後の建立。本尊、千手観音。

中門は天保3年(1832)に完成。三間一戸楼門、入母屋造、本瓦葺で、正面と背面に唐破風を付ける。一階正背面両脇に四天王像を安置する。

大門は三間一戸楼門、入母屋造、本瓦葺の大型建物で、大棟鬼瓦の銘から宝永4年(1707)に屋根が葺かれ完成。一階正面両脇の金剛力士像二体が寺門の入口を守る。

22 国名 粉河寺庭園 粉河

中門内側の広場と本堂前庭との間にある3mの高低差を取り込み、参道階段の左右に巨石を用いて組み石の庭園とする。結晶片岩、紫石、龍門石などの紀州の名石とサツキ・ソテツを巧みに配した名園で巨大な本堂にふさわしい豪快な庭園である。桃山時代の作庭。

9 市史 旧池田トンネル 重行～神通

薗坂峠越えの旧大坂街道の便を図るため明治19年(1886)に竣工した県内最古の洋式トンネル。長さ77.5mで煉瓦を長手積とし断面は馬蹄形を呈する。南側正面に「池田隧道」の扁額が懸かる。煉瓦約4万個は旧打田町窟で焼き、セメント465樽はトルコから輸入。

3 有建 小田井灌漑用水路・木積川渡井 西三谷

紀州藩主徳川吉宗(8代将軍)の命を受けた大畑才蔵により開削された小田井用水の木積川水路橋。当初の木製橋を大正2年(1913)に橋長6.5m、橋幅3.8m、水路幅1.8mのレンガ造単アーチ橋に改修したもの。レンガ積みはイギリス積技法を用いる。

4 市建 正福寺宝篋印塔2基 中三谷

完存する左塔は高さ173.5cm、相輪上部を欠く右塔は現高156cm。両塔ともに和泉砂岩製で慶長13年(1608)に建立された。基礎部の銘文に「為大念仏一結衆　現世安穏　後世善処　慶長十三申戊八月吉日　池田　三谷村」とある。

1 国史 紀伊国分寺跡 東国分

奈良時代、全国に建立された国分僧寺の一つで淡路、讃岐の両国分寺に関連性をみる。天平勝宝8年(756)には伽藍が整うが、元慶3年(879)に焼失。鎌倉時代には衰退した。講堂跡に立つ本堂は元禄13年(1700)の再建。史跡公園として平成14年度整備完了。

2 市建 紀伊国分寺本堂 東国分

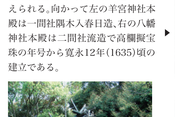
国分寺創建期の堂塔は元慶3年(879)の大火災で焼失。その後、講堂跡に本堂や仮堂が幾度も再建された。現本堂は元禄13年(1700)の建立。桁行5間、梁間4間、棟高11.7m、本瓦葺入母屋造・重層屋根。平成4年に講堂基壇の中央へ解体移築された。

5 市史 八幡塚古墳 下井阪

墳丘径約18m、高さ約5mの円墳で、中央部に横穴式石室を、墳丘裾に箱式石棺を もつ。6世紀中頃を示す石室出土遺物には、金張銀地空王のほかに金銅製の冠や飾履などの装身具断片、須恵器の七連坏などがあり、岩出市の箱山古墳群郡品に類例を見る。

6 市天 ツバキの純林 中井阪

この地は古墳群であるとともに、かつては周辺住民の埋葬地であった。正確な年代はわからないが、墓地美化のためか江戸期以前に植えられたとみられるツバキが、その後、自然生えもあり現在120本以上が群生している。



8 市天 大井邸のイブキ 西大井

西南日本の海岸に多く自生する常緑高木。ビャクシン(柏槇)ともいう。大井氏宅庭にある本樹は幹周り3.9m、高さ12.5mで樹齢300年位。樹勢きわめて旺盛で、地上2m余のところで2枝に分かれる。地上2m位まで幹のよじれがあって見事である。

7 県建 西田中神社本殿2棟 中井阪

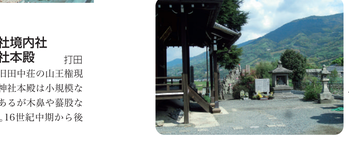
もとは旧田中荘の羊宮神社と呼ばれてきたが戦後八幡神社ほかの2社を合祀。室町時代末期の建立と考えられる。向かって左の羊宮神社本殿は一間社隅木入春日造、右の八幡神社本殿は二間社流造で高欄擬宝珠の年号から寛永12年(1635)頃の建立である。

11 市天 阿弥陀寺のモッコク 広野

暖地の海岸近くに自生し、樹高7mを超えることがある。本樹は幹周り2m、樹齢300年以上(推定)で地上約2mのところで大きく枝分かれしている。モッコクはなかなか大きくなりにくい木であり、これ位の大きいものは付近では見当たらない。

12 県建 東田中神社境内社 旧竹房神社本殿 打田

西田中神社と同じく旧田中荘の山王権現社に合祀された旧竹房神社本殿は小規模な一間社隅木入春日造であるが本桧や蟇股などの装飾に優れている。16世紀中期から後期の建立と見られる。



10 有建 河野家住宅主屋ほか2棟 赤尾

河野家住宅は登録された主屋、離れ座敷のほか数棟の土蔵からなる。主屋は式台玄関を備える堂々とした構えで明治時代前期頃、離れ座敷は大正時代頃の建築と見られ高い天井の主座敷が特徴的である。表門も木柄が大く重厚な造りである。

13 市史 明算上人誕生地 竹房

明算は治安元年(1021)旧田中庄に生誕、俗姓は佐藤氏であった。11歳で高野山に登り、修学の後、高野山中院流を開き高野山復興の祖といわれる。承保2年(1075)、故郷に龍禅院を建て自作の愛染明王を、その鎮守として一ノ宮八幡宮を祀った。嘉承元年(1106)没。

23 市建 粉河産土神社本殿2棟・天福社本殿 粉河

旧粉河村の総鎮守で粉河寺の鎮守でもある。本殿2棟は同寸法の一間社隅木入春日造で並列し、左側が丹生大明神社、右側が若一王子社。本殿は、掘宝珠銘から享保12年(1727)建立とみられる天福社よりやや古い様相を示し元禄末から宝永にかけての建立か。

天福社

21 県建 粉河寺童男堂 粉河

本坊入口東側に建つ。棟札から延宝7年(1679)、三間四方の正堂に五間二間の礼堂を奥行き一間の合いの間で繋ぎ、宝暦5年(1755)には現状の屋根に改築したことがわかる。粉河寺縁起絵巻に登場する千手観音の化身とされる童男行者を祀る。

23 市名 粉河寺御池坊庭園 粉河

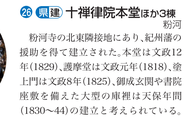
和泉山脈山麓の尾根端を取り込み、サツキ刈り込みを効かせ配し緑泥変岩の築山をもつ池景回遊式庭園である。代々粉河寺の頭坊であった御池坊が元禄元年(1686)に再建された時の庭園と考えられる。近世庭園史を語る上で重要な位置を占める。

24 市天 踞木地のクス 粉河

粉河寺本堂東側鐘楼そばにあり、粉河寺縁起絵巻にも描かれている大クス。幹周り7.8m樹高16m。粉河寺創始者、大伴孔子古がこの木に踞って下を通るシカやイノシシを弓矢で狩ったとの伝承がある。幹周りの規模から樹齢1000年前後か。

29 市天 大神社のクス 粉河

西国3番札所粉河寺大門前の大神社本殿の北側にある。紀伊続風土記に「境内樟の大樹あり 周囲3丈5尺余」と記載される大クス。樹幹周り15m、樹高25m、樹齢900～1000年といわれる。県下第3位のふるさとといわれている。



26 県建 十禅律院本堂ほか3棟 粉河

粉河寺の北東隣接地にあり、紀州藩の援助を得て建立された。本堂は文政12年(1829)、護摩堂は文政元年(1818)、徐上門は文政8年(1825)、御成玄関や書院座敷を備えた大型の庫裡は天保年間(1830～44)の建立と考えられている。本堂本尊、阿弥陀三尊。

27 市名 十禅律院庭園（洗心庭） 粉河

和泉山脈の高峰成高山を借景とした借景式枯山水庭園で、北に蔦城山を、南に紀の川を一望する。庭石等の配置には江戸時代末期の繊細優美な時代様式の特徴が見られることから、文政12年に建立された本堂と同時期の文政から天保年間の作庭と考えられる。

十禅律院本堂

十禅律院庭園

十禅律院山門

十禅律院山門

25 市天 十禅律院のイブキ 粉河

十禅律院の徐上門を入った左側にある。樹勢旺盛ではあるがやや小ぶりである。大井邸のイブキよりもやや小さいが紀の川市では数少ない一本である。幹廻り4m、樹高約8m、樹齢約200年と推定される。

14 市建 千田家住宅主屋 南志野

千田家は、この地で代々庄屋を勤めた家である。平屋建ての主屋は、棟札から安永6年(1777)の建築で、主屋の東側に離れ、北西に蔵、南側に長屋門をもつ。座敷の周囲に縁側を廻す形式は淡島街道沿いによく見られるが千田家はその中で一番古い例である。

15 市建 気比神社本殿 猪垣

二間社流造(妻三間)、正面千鳥破風付、軒唐破風付、銅版葺の本殿は気鎮神と八幡神の二神を祀るためか身舎を二間に分かち二座とする。身舎蟇股などの彫刻は多彩で極彩色とし賑々しい。17世紀後半の建立とみられる。旧藤井・猪垣村の産土社である。

16 市建 熊野神社本殿2棟 及び石灯籠2基 中津川

本殿2棟は、ほぼ同形式、同規模の隅木入春日造で並立する。右に若一王子と熊野権現、左に丹生明神と妙見菩薩を祀る。寛政9年(1797)に建立され安政6年(1859)に修理されている。本殿前の石灯籠2基には「正平24年(1369)山村」の銘が残る。

17 市建 四社明神社本殿 上丹生谷

桁行一間、梁間一間の切妻造、軒唐破風付、板葺の本殿は彩色壁画のほか欄間彫刻、軸部や組物部を彩色する。梁行中間に四区の扉構えを作り、丹生明神、高野明神、気比明神、厳島明神を祀る。粉河寺との関係が深い社で17世紀代の建立とみられる。

18 県天 加茂神社の公孫樹 西川原

貴志神社境内の北半を被って成るイチョウの雌株。幹周り約5.5m、高さ約30mで、地上3.5mで分岐し数本の支幹を伸ばす。樹冠直径は南北28m、東西12mで南東方向へ伸張が著しい。短い気根が支幹基部を中心に垂下する。

19 市天 賀茂神社のスギ2本 西川原

賀茂神社拝殿の下に2本の大杉が並んでいる。左側樹がやや大きく幹周り4.8m、樹高35m。右側樹の幹周り4.7m、樹高38m。県指定天然記念物に指定されているイチョウ(公孫樹)の大樹とともに社叢を形成する。

35 県史 華岡青洲の墓碑 西野山

江戸時代中期の外科医、華岡青洲は、春林軒塾の北東約150mの華岡家墓地の中央に葬られている。一際大きな方柱形の墓碑は3段の台石の上立ち笠石を置く。正面に「天聰院聖智直幸居士」、右側面に俗名等、左側面に命日等が刻まれている。

36 市建 華岡青洲春林軒塾主屋 西野山

旧粉河町に残されていた建物と発掘調査から、面積216.15㎡、桁行9間、梁間4間の東西棟の平屋建物で、座敷、診察室ほか土間の廻などが判明。出土遺物などから青洲50歳前後の文化5年(1809)頃の建築とみられる。平成10年(1998)に移築復元された。

37 市史 華岡青洲春林軒跡 西野山

春林軒塾復元整備に伴う発掘調査により18世紀後半から19世紀中頃にかけて2時期の華岡青洲住宅兼診療所等の医療施設が確認された。中でも、第1期遺構からの手術道具出土はそれが初期春林軒塾であることを証明した。平成10年、1613㎡が史跡に指定された。

30 市建 旧南丘家住宅 粉河

紀州藩鷹狩りに関する職制として和歌山城下以外ではこの粉河のみに鷹狩りの役人を配置していることから粉河が藩主の鷹狩りの拠点であったことを示す遺構。和歌山県下でも保存状態良好な藩主住宅は数少なく貴重である。

31 県名 藤崎井戸 藤崎

名手川が紀の川に注ぐあたりは老松のあいだに奇岩怪石が立ち並ぶ結晶片岩の中島や標高56mの小丘などが複雑な地形を形成している。丘上には弁財天が祀られ、幕末の頃、琴の名手、古岳上人がここからの紀の川や龍門山の姿をこよなく愛でたという。

32 県天 光明寺の松 名手市場

本堂前庭に特殊な枝振りに育てられたクロマツ。幹周り2.7m、株元から0.7mで3本の支幹に別れ、南、西、北に伸びる。最も大きな枝は西へ約8m伸び他の枝と相寄って優雅な樹冠を形成している。天正11年(1572)、境内拡張時に植えられたと伝えられている。

33 国史 旧名手宿本陣 名手市場

市場村の富豪であった妹背家は江戸時代には地主に加えられ、代々、名手庄の大庄屋を務めた。その屋敷は大和街道に面し、藩主が参勤交代や鷹狩などに利用した。約940坪の敷地の南半に重要文化財の主屋、米蔵、南蔵、その北半に伊都郡奉行同心詰所跡がある。

38 県建 名手八幡神社本殿3棟 穴伏

本殿3棟は、西から17世紀中頃の丹生社、18世紀代の八幡社、天神社が並ぶ。いずれも一間社春日造、檜皮葺でほぼ同規模、そのうち丹生明神社殿は伝統的建築様式を よく残し意匠的にも優れ、他の2棟とともに並立社殿の形態をよく残している。

34 国建 旧名手本陣 妹背家住宅主屋ほか2棟 名手市場

大和街道に面する妹背家住宅は正徳4年(1714)の市場村火災による類焼後、享保3年(1718)居宅部が、延享2年(1745)に紀州藩主が利用した座敷部が再建された。敷地の西側に、類焼を免れたと見られる主蔵2棟が建つ。本陣の遺構として価値が高い。

39 有建 小田井灌漑用水路・龍之渡井 西野山

紀州藩主徳川吉宗(8代将軍)の命を受けた大畑才蔵により開削された小田井用水の穴伏川水路橋。当初の木製橋を大正8年(1919)に橋長20.5m、橋幅5.3m、水路幅3.7mのレンガ・石造単アーチ橋に改修したもの。レンガ積みはフランス積技法を用いる。